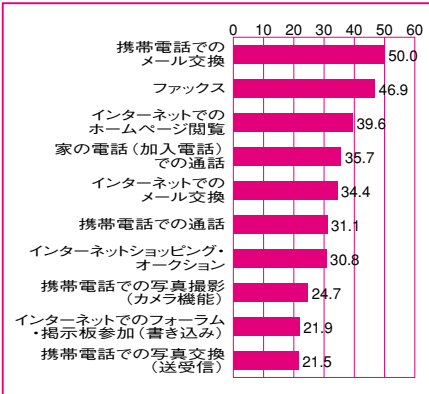


「子どもがいる人に適している」と思う通信メディア機能



私は「働くお母さん」である。自己主張は強いが「ききわけ」が今一つなお年ごろの一歳児に加え、壮絶なつわりをもたらし二人目がお腹にいる。現在、ようやく安定期に入り、長女の恐ろしいまでの食欲を直視できるまでに回復した。

一般に、現代社会では夫婦の持ちたい子どもの数が、実際の子どもの数を上回っている。いわゆる「持ちたくても持てない」状況だ。なぜか体質的な不妊が増えているとされる背景も見逃せない。しかし物理的な不妊も多い。すなわち、「身体的には産めるけど状況的に産んでいられない」というものだ。やっとの思いで一人出産しても、仕事と育児に忙殺

コラム

地域ネットワークで友だちづくり
携帯電話が「会話」の手段に

第一生命経済研究所 研究員 宮木由貴子



「働くお母さん」である。自己主張は強いが「ききわけ」が今一つなお年ごろの一歳児に加え、壮絶なつわりをもたらし二人目がお腹にいる。現在、ようやく安定期に入り、長女の恐ろしいまでの食欲を直視できるまでに回復した。

一人で、現代社会では夫婦の持ちたい子どもの数が、実際の子どもの数を上回っている。いわゆる「持ちたくても持てない」状況だ。なぜか体質的な不妊が増えているとされる背景も見逃せない。しかし物理的な不妊も多い。すなわち、「身体的には産めるけど状況的に産んでいられない」というものだ。やっとの思いで一人出産しても、仕事と育児に忙殺

されて、それだけでも大変なのにさらにもう一人産む決断に至るにはかなりの覚悟が要る。

つわり中の私の毎日は、長女を保育園に迎えに行つて夕食を与え、入浴させるだけでいっぱいいっぱい。自分のことも仕事のことと疎かになり、彼女の夕食を作ることが毎日の懸念事という有り様。妊娠五カ月に入る頃までというのは、母体は非常に不安定だ。無論、この時期にひどいつわりに見回れる人もいれば、全くつわりを感じないという人もいます。しかしいずれの体質にしても、この時期に最も母体に気をつかわなければならぬ。なぜ「産前休暇」がこの時期にないのか；何度そう思ったことだろう。この時期に産前休暇がもらえるなら、私は出産直前まで働いてもいいとどれだけ思ったかしれない。

こんな綱渡り状態の生活が二カ月近く続いたわけだが、幸い私は長女のおかげでちつとも孤独ではなかった。無論、まだるくにしやべれない長女が私の相談相手になったわけではない。長女を介して私はいつのか地域ネットワークを構築していったのである。長女妊娠中には地域に全く友だちがいなかった(その必要

性すら感じていなかった)私も、育児休業期間中にいつのまにか多くの近隣友人ができていた。しかも、復職後は電子メールを密に活用することで、私の地域ネットワークは弱体化することなく、むしろコミュニケーション頻度が増してネットワークは強くなっていったのだ。友人たちは、日中仕事をしている私の携帯電話に気軽にメールを送ってくれる。携帯電話でのメール交換は相手の時間を侵害することがないので、子育て中の母親に非常に支持が高いのだ。友人たちは、仕事と育児とつわりに悩む私に、状況に応じて夕食を作ってくれたり、差し入れをしてくれたり、メッセージを寄せてくれたりと多面にわたるサポートをしてくれていた。

さらに私の地域ネットワークを広げたのは保育園の存在だった。保育園は正に地域の人のルツボである。そこで知り合った多くの方々や保育士の方々が、私のつわりと子育てをどれだけ支えてくれたかしのれない。保育士さんには不安定になりがちな長女をフォローしてくださり、他のお母さん方は第二子妊娠に関する様々なアドバイスをしてくれた。一般に、有職ママは地域とのつながりが專業

主婦ママに比べて弱いとされているが、私個人に関していえば決してそのようなことはなかったといえる。そんなこんなで、多くの人に助けられ、私はだましましだがこの時期を乗り切った。仕事を持つ女性の二人目出産は実に困難である。ただでさえ大変な妊娠に加え、幼い長子の負担は小さくない。しかし、長子の時にはなかった「地域ネットワーク」という資源があることもまた事実である。しかも現代は通信メディアが浸透している。携帯電話を使つた電子メールは相手の時間を侵害しない「手紙」にして即時性があるという、子育て中の母親にはうってつけの「会話」手段だ。私は今回の妊娠で、こうした資源とツールの存在を改めて認識し、その重要性を実感した。そして、身内以外の人間に「頼る」ことも学習した。

地域ネットワーク——。職場の理解だけでは乗り切れない、私生活の部分でのサポートネットワークというものが、核家族化の進んだ現代だからこそ見直されるべきなのかもしれない。

みやき・ゆきこ
一九七二年東京生まれ。九四年第一生命経済研究所(旧ライフデザイン研究所)入社。専門はメディア文化論、消費者問題、コミュニケーション、若者文化など。著書に「人材革命」(共著、日本医療企画 一九九六年)など。